中学校における音楽鑑賞教材の選択についての実証的検討

A study on the selection of musical pieces for the music appreciation instruction in junior high schools

森橋　和也
Kazuya Morihashi
（紀の川市立粉河中学校）

菅　　千索
Sensaku Suga
（和歌山大学教育学部心理学教室）

要旨：本研究では中学校の音楽鑑賞教材を用いて、それらの曲に対する中学生の印象を明らかにすることにより、今後の音楽鑑賞教育に対して新たな視点を提案することを目的としている。そのために、まず和歌山県の実際の音楽鑑賞教育がどのように行われているかを把握する必要があると判断されたため、和歌山県のすべての中学校の音楽教師を対象にアンケート調査を行った結果、共通教材が廃止された以降においても、旧共通教材を中心に選曲されていることが明らかとなった。また、それらの教材をほとんどの教師が、それぞれの学年の鑑賞教材として適当であると考えていることも示された。さらに教科書以外の曲はほとんど使われておらず、教科書に掲載されている曲の中にも、ほとんど使われていない曲もあることが明らかになった。つぎに、教科書に掲載されている音楽鑑賞教材（クラシック音楽）を聴いたときに、その音楽に対して生徒がどのような印象を持つかを調べるために、各学年の教科書から、3曲ずつ計９曲を選び、各学年2クラスずつ（１年生67名、２年生67名、３年生60名）に聴取させて印象評定を求めた。その結果、因子分析により好き・嫌いや快・不快などとの負荷が高い「嗜好性因子」と、複雑さや難しさなどとの負荷が高い「複雑性因子」と解釈された２因子が抽出された。実験に使用した９曲のクラシック音楽を、これら２因子について検討を行った結果、２年生と３年生では「嗜好性」や「複雑性」にあまり差が見られなかったことから、音楽鑑賞教材を検討する際、扱う学年をあまり区別する必要がないと思われるが、１年生については、他の学年と区別する必要があることが示唆された。また、教科書に掲載されている通りの学年で扱うことが望ましいと考えられる曲と、そうでない曲、さらに、何らかの工夫が必要と考えられる曲があり、これまでに聴いたことがどれくらいあるかという既知度も影響する可能性があることが示された。

キーワード：音楽鑑賞指導、クラシック音楽、学習指導要領、音楽科、中学生

調査１

平成14年度から実施された新学習指導要領により、週５日制の完全実施や総合的な学習の時間、選択授業の拡大など、これまでとは大きくカリキュラムや指導内容が変わることとなり、音楽科ではすべての学年・領域において共通教材が廃止されたため、共通教材にとらわれずに授業者が自由に選曲を行うことができるようになった。

そこで、新学習指導要領が施行されて以降、音楽鑑賞教材としてどのような曲が選ばれ、どのような方法で鑑賞指導が行われているのかについて、和歌山県下の音楽教師に対してアンケート調査を行い、①教科書に掲載されている曲のうち、実際に授業で使用されているのは何曲程度か、また、一つの曲をどのような方法で何回鑑賞させるのか、②音楽教師が教科書に掲載されているそれぞれの曲を、各学年の鑑賞教材としてどの程度適切と感じているかを調査し、音楽鑑賞教育の実態を明らかにすることを目的とする。ただし、本研究の対象はクラシック音楽（洋楽）のみとする。

［方法］

和歌山県下の中学校136校（専任の音楽科教師がいるすべての学校）に以下の内容の質問紙を送付し回答を求めた。教科書に掲載されている音楽鑑賞曲（洋楽）の中から１年生は、シューベルト作曲の歌曲「魔王」（以下「魔王」と略す）、ヴィヴァルディ作曲の「和声と創意の試み」第１集「四季」より“春”（以下「春」と略す）、スメタナ作曲の連作交響詩「我が祖国」より“モルダウ”（以下「モルダウ」と略す）、レスピーギ作曲の交響詩「ローマの松」より“アッピア街道の松”（以下「ローマの松」と略す）の４曲、２・３年上からは、ベートーヴェン作曲の交響曲第５番ハ短調作品67「運命」より“第１楽章”（以下「運命」と略す）、

ドヴォルザーク作曲の交響曲第９番ホ短調作品95「新世界より」より“第４楽章”（以下「新世界より」と略す）、メンデルスゾーン作曲の「ヴァイオリン協奏曲ホ短調作品64」より“第２楽章”（以下「ヴァイオリン協奏曲」と略す）、チャイコフスキー作曲の「ピアノ協奏曲第１番変ロ短調作品23」より“第１楽章”（以下「ピアノ協奏曲」と略す）、ロドリーゴ作曲の「アランフェス協奏曲」より“第２楽章”（以下「アランフェス協奏曲」と略す）の５曲、２・３年下からは、モーツァルト作曲の歌劇「フィガロの結婚」より“恋とはどんなものかしら”（以下「フィガロの結婚」と略す）、ウェーバー作曲の歌劇「魔弾の射手」より“私の胸は一斉に脈打ち”（以下「魔弾の射手」と略す）、ロッシーニ作曲の歌劇「セビリアの理髪師」より“私は町の何でも屋”（以下「セビリアの理髪師」と略す）、ヴェルディ作曲の歌劇「アイーダ」より“清きアイーダ”（以下「アイーダ」と略す）、ドリーブ作曲のバレエ音楽「コッペリア」より“ワルツ”（以下「コッペリア」と略す）、チャイコフスキー作曲のバレエ音楽「白鳥の湖」より“情景”（以下「白鳥の湖」と略す）、ファリャ作曲のバレエ音楽「三角帽子」より“ファンダンゴ”（以下「三角帽子」と略す）、ストラヴィンスキー作曲のバレエ音楽「春の祭典」より“序奏”～“春のきざし”（以下「春の祭典」と略す）の８曲、合計17曲それぞれの曲について、各学年の音楽鑑賞教材としてどの程度適しているかを、「まったく適さない」～「非常に適している」の５段階で評定を求め、実際にその曲を授業で使用したこと（使用する予定）があるかどうか、また、使用した（する予定がある）と答えた場合、１つのクラスに対して何回聴かせたか、さらにその鑑賞方法を、「音のみの鑑賞」、「音と映像による鑑賞」、「その他の方法」の中から選ばせた。尚、２・３年生については、通常２年生で２・３年上を、３年生で２・３年下を使用することが多いことから、２・３年上の掲載曲を２年生の教材として、２・３年下の掲載曲を３年生の教材として評定を求めた。なお、和歌山県下の多くの中学校では教育芸術社の教科書が採用されているため、本研究では教育芸術社の教科書に採用されている曲のみを扱っている。

［結果］

40名（回収率29％）からの回答が得られ、集計結果を使用頻度の高い曲順に並べたものがTable１である。なお、評定は、「まったく適さない」を１点～「非常に適している」を５点として得点化した。集計結果から、使用頻度の高い“魔王”、“運命”、“アランフェス協奏曲”、“モルダウ”、“春”、“アイーダ”の６曲を「使用頻度高群（以下H群と略す）」、“白鳥の湖”、“ローマの松”、“新世界より”、“ピアノ協奏曲”、“ヴァイオリン協奏曲”の５曲を「使用頻度中群（以下M群と略す）」、“フィガロの結婚”、“春の祭典”、“セビリアの理髪師”、“魔弾の射手”、“三角帽子”、“コッペリア”の６曲を「使用頻度低群（以下L群と略す）」として、各群の平均（SD）はH群が3.90（1.15）、M群が3.32（1.03）、L群が2.85（0.79）であり、群間に差が見られるかどうかを検討するため分散分析を行ったところ、主効果は有意であり（$F_{(2,\ 555)}=51.67$, $p<.01$）、LSD法による多重比較を行った結果、すべての群間において有意な差が認められた（$p<.01$）。

Table１　教師アンケート集計表

	使用状況順		使用状況 した	使用状況 しない	評定 平均	評定 SD
H群	1	魔王	36	1	4.43	0.86
	2	運命	35	1	4.33	0.79
	3	アランフェス協奏曲	35	2	3.95	0.88
	4	春	34	4	4.13	0.95
	5	モルダウ	33	3	4.05	0.97
	6	アイーダ	25	10	3.79	1.07
M群	7	白鳥の湖	15	17	3.54	1.02
	8	新世界より	14	21	3.55	0.87
	9	ローマの松	13	19	3.12	1.19
	10	ピアノ協奏曲	11	22	3.70	0.69
	11	ヴァイオリン協奏曲	10	23	3.14	0.78
L群	12	フィガロの結婚	7	26	2.96	0.84
	13	春の祭典	7	26	3.00	0.85
	14	セビリアの理髪師	6	27	2.68	0.68
	15	魔弾の射手	5	28	2.85	0.77
	16	コッペリア	4	27	2.80	0.75
	17	三角帽子	4	26	2.95	0.64

［考察］

現在音楽鑑賞教材としてほとんどの教師が使用していると考えられる上位６曲すべてが旧共通教材であったことから、共通教材が廃止された以降も、ほとんどの教師が旧共通教材を中心に選曲を行っていることが明らかになった。また、評定においてもH群は他の群に比べて高く、ほとんどの教師がそれぞれの学年にふさわしい教材であると考えていると判断される。

つぎにM群に含まれる曲は、ある程度適切であると感じながらも、授業で使用される割合が比較的低い曲が多かったことから、時間をはじめとする何らかの制約のために使用することが出来ずにいる曲であると考えられる。

一方L群では、この群に含まれる６曲すべてが２・３年下で扱われる楽曲で、歌劇（オペラ）とバレエ音楽であった。これらの楽曲がほとんど使われない理由として、歌劇、バレエ音楽ともに、演劇や舞踏を伴うために、音楽鑑賞だけでは本来これらの持っている教材性を十分に生かすことが難しく、映像教材が必要となってくること、歌曲や台詞は日本語ではないこと、さらに、演奏時間の長さなどもあげられる。それらの一部分を扱う場合でも、その前後の流れや、全体のストーリー、構成などを解説しなくてはならず、それらに大変時間がかかることも原因の一つでであろう。

ところで、今回の調査ではこのL群の曲に対して、「よく知らないために評定できない」という回答がいくつかあった。さらに、これらの楽曲すべての使用頻度が非常に低いにもかかわらず、平均値がどの曲でも3.0に近く、標準偏差も小さいことから、正しく回答されている中にも、楽曲をよく知らないために評定尺度の中央付近を選んだ教師が多くいた可能性がある。その結果、評定の平均値がどの曲でも3.0に近くなったと予想されることから、L群は中程度に評価される楽曲と捉えるより、むしろ評価されなかった楽曲と捉える方が適切であるのかも知れない。

さらに、それぞれの楽曲が教科書で扱われているページ数に注目してみると、H群の６曲に使われている教科書のページ数が約11.5ページに対して、L群の６曲にはわずか約1.5ページ使われているだけである。これは、使用頻度とほぼ同様の結果となっており、大変興味深いところである。

今回の調査で明らかになったことは、第１に、授業時数が減少する中で、鑑賞教材を取り扱う時間の確保が難しいためか、ごく限定された楽曲（特に旧共通教材）のみ取り扱われていることが多いことが明らかとなった。

第２に、L群の曲のように、よく吟味をされていない上に、ほとんど使われていない楽曲も数多く存在することも判明した。さらに、今回の調査では教科書掲載曲以外の曲で使用した曲についても記述するように求めたが、ほとんど回答がなかったために取り上げなかったが、授業時数の少なさから考えると、教科書以外の楽曲にまで検討が及ばないのは仕方のないことかもしれない。しかし、これまでの共通教材以外の教科書掲載曲やその他の楽曲の中には中学生の音楽鑑賞曲として適当な楽曲も数多く存在するはずである。そのような曲の中から、生徒の実態や授業の形態に応じた楽曲を選ぶことは大変重要なことである。今後はそのようなことを考慮した上での選曲が行われることが望まれる。

調査２

人は、非常に単純あるいは複雑と知覚する音楽の曲を嫌い、中程度に複雑であると知する音楽の曲を好むと考えられることから、音楽鑑賞教材も中程度の複雑さを持っているものが適していると判断される。当然のことながらこれらには個人差があり、同じ楽曲に対して、すべての生徒が同じような印象を持つわけではない。しかし、音楽の教科書に掲載されているクラシック音楽、特に洋楽に対して中学生がどのような印象を持っているか知ることは、現場の音楽教師が音楽鑑賞教材を選択する際の重要な手がかりとなるはずである。そこで、本研究では、教科書に掲載されている音楽鑑賞教材を中学生に聴取させ、その印象評定から生徒の音楽に対する嗜好傾向を調べ、どの楽曲が各学年の音楽鑑賞材として適しているかを検討することを目的とする。

［方法］

被験者：和歌山県の町立中学校の中学生６クラス（各学年２クラスずつ）194名、（１年生：男子36名、女子31名。２年生：男子34名、女子33名。３年生：男子29名、女子31名）が研究の対象となった。

手続き：まず、教育芸術社の音楽の教科書、１年、２・３年上、２・３年下の教科に掲載されているクラシック音楽（洋楽）の中から、複雑性が異なると考えられる楽曲よりそれぞれ３曲ずつ計９曲が選ばれた（Table２）。また、練習試行用にヴィヴァルディの「和声と創意の試み」第１集「四季」より“春”が１年生の教科書から選ばれた。選択された10曲はそれぞれ１分間ずつに編集し使用した。つぎに谷口（2001）を参考に複雑さと好き嫌いに関係すると考えられる形容詞対を、それぞれ６個づつ計12対用意し、各曲の印象を12の尺度において、それぞれ７件法にて評定する質問紙が作成された。12の尺度は、複雑さが「単純な―複雑な」、「あっさり―くどい」、「わかりやすい―わかりにくい」、「易しい―難しい」、「ほぐれた―もつれた」、「浅い―深い」であり、好き嫌いが「好き―嫌い」、「快い―不快な」、「親しみやすい―親しみにくい」、「なじみがある―なじみがない」「良い―悪い」、「興味がある―興味がない」である。また、それぞれの曲について、今までに聴いたことがあるかどうかを「非常によく知っている」～「まったく知らい」の５件法で評定して

Table２　調査２で使用した作品リスト

教科書	作　曲　者	曲　　目
１年生	シューベルト	歌曲「魔王」
	スメタナ	連作交響詩「我が祖国」より“モルダウ”
	レスピーギ	交響詩「ローマの松」より“アッピア街道の松”
２・３年上	ベートーヴェン	交響曲第５番ハ短調「運命」より“第１楽章”
	ドヴォルザーク	交響曲第９番ホ短調「新世界より」より“第４楽章”
	メンデルスゾーン	ヴァイオリン協奏曲ホ短調より“第２楽章”
２・３年下	モーツァルト	歌劇「フィガロの結婚」より“恋とはどんなものかしら”
	ドリーブ	バレエ音楽「コッペリア」より“ワルツ”
	ストラビンスキー	バレエ音楽「春の祭典」より“序奏”～“春のきざし”

Table 3　主成分分析の固有値と寄与率

主成分	固有値	寄与率(%)	累積寄与率(%)
1	5.69	47.4	47.4
2	2.35	19.6	67.0
3	0.67	5.6	72.6
4	0.57	4.8	77.3
5	0.46	3.8	81.2
6	0.43	3.6	84.8
7	0.40	3.3	88.1
8	0.39	3.3	91.3
9	0.34	2.8	94.2
10	0.27	2.3	96.4
11	0.25	2.1	98.5
12	0.17	1.4	100.0

もらうようにした。

さらに、実験の最後に年齢、性別のほか「音楽を聴くこと」、「クラシック音楽を聴くこと」、「楽器を演奏すること」、「歌を歌うこと」については「非常に好き」～「非常に嫌い」の５件法で、また授業以外での音楽活動経験の有無を２件法で回答させた。

本調査では、以下のようなカウンターバランスがとられた。(a) 曲の提示順序による効果を相殺するために、各学年の２クラスが同じ順序にならないように、提示順序を逆転させた。(b) 質問紙の質問順による剰余変数を相殺するために、出席番号をもとに、偶数と奇数で質問紙の質問順を反転させた。

実験では、まず質問紙が配られ、検査者による教示の後、それぞれの曲が１分間提示された。評定はそれぞれの曲の提示が終わるごとに行われ、これを練習試行の“春”を含めて10回繰り返された。

［結果］

12の印象評定尺度については、「単純な」、「あっさり」、「わかりやすい」、「やさしい」、「ほぐれた」、「浅い」、「好き」、「快い」、「親しみやすい」、「なじみがある」、「良い」、「興味がある」に１点を、これらの対極である、「複雑な」、「くどい」、「わかりにくい」、「難しい」、「もつれた」、「深い」、「嫌い」、「不快な」、「親しみにくい」、「なじみがない」、「悪い」、「興味がない」に７点を与え、得点化した。

また、「音楽を聴くこと」や「クラシック音楽を聴くこと」などの５件法による評定尺度項目については、「非常に嫌い」を１点、「非常に好き」を５点として得点化した。

因子分析：まず、すべての曲、尺度、被験者を含めて主成分分析を行い、固有値や寄与率、累積寄与率（Table３）から２因子と判断して、因子分析（SMCを初期値とする共通性の反復推定による主因子解、および直交バリマックス回転）を行った（Table４）。各因子について因子負荷量0.5以上を示した尺度より因子の解釈を行った結果、第１因子は「好き―嫌い」「興味がある―興味がない」「良い―悪い」「親しみやすい―親しみにくい」「快い―不快な」など、好き嫌いに関する項目に負荷が高いことから「嗜好性因子」と命名した。一方、第２因子は、「易しい―難しい」「単純な―複雑」「ほぐれた―もつれた」など、複雑さに関する項目に負荷が高いことから「複雑性因子」と命名した。

Table 4　因子分析のVarimax回転後の因子負荷量

評定尺度	因子１	因子２	共通性
親しみやすい－親しみにくい	0.75	0.27	0.635
浅い－深い	-0.17	0.63	0.426
快い－不快な	0.69	0.47	0.697
あっさり－くどい	0.45	0.65	0.625
好き－嫌い	0.89	0.06	0.796
わかりやすい－わかりにくい	0.57	0.41	0.493
なじみがある－なじみがない	0.64	0.00	0.410
単純な－複雑な	0.05	0.75	0.565
興味がある－興味がない	0.86	-0.08	0.746
ほぐれた－もつれた	0.38	0.67	0.593
良い－悪い	0.80	0.24	0.698
易しい－難しい	0.17	0.75	0.591
寄与	4.35	2.92	7.275
相対寄与率(%)	59.8	40.2	100.0

本調査で使用された９曲を、この２因子それぞれについて、得点の高い順に並べたものをTable５に、また

Table 5　因子得点の学年別および全体の平均

	曲　目	１年	２年	３年	全員
嗜好性因子	春の祭典	0.67	0.47	0.50	0.55
	魔王	0.19	0.54	0.71	0.47
	フィガロの結婚	-0.79	0.56	0.36	0.04
	コッペリア	-0.21	0.14	-0.03	-0.03
	ローマの松	-0.15	-0.08	-0.18	-0.13
	新世界より	0.38	-0.37	-0.51	-0.15
	ヴァイオリン協奏曲	-0.33	-0.03	-0.24	-0.20
	運命	-0.17	-0.33	-0.16	-0.22
	モルダウ	-0.60	0.06	-0.45	-0.33
複雑性因子	春の祭典	0.22	0.52	0.95	0.55
	魔王	0.52	0.53	0.47	0.51
	運命	-0.31	0.52	0.71	0.29
	モルダウ	0.56	-0.20	-0.08	0.10
	新世界より	-0.58	0.36	0.55	0.10
	ローマの松	-0.43	0.14	0.18	-0.05
	コッペリア	0.00	-0.31	-0.36	-0.22
	フィガロの結婚	0.33	-0.63	-0.70	-0.32
	ヴァイオリン協奏曲	-0.88	-0.94	-1.07	-0.96

注：因子ごとに全員での降順ソート
嗜好性因子は負方向が「好き」
複雑性因子は正方向が「複雑」

Table 6　既知度評定の学年別平均（標準偏差）

曲目	1年	2年	3年
魔王	1.30(0.67)	1.91(1.37)	1.35(0.83)
モルダウ	2.78(1.54)	2.72(1.30)	3.37(1.22)
ローマの松	1.57(0.85)	1.37(0.64)	1.43(0.78)
運命	2.69(1.56)	2.66(1.39)	3.43(1.31)
新世界より	2.55(1.53)	2.10(1.12)	2.25(1.37)
ヴァイオリン協奏曲	1.31(0.55)	1.16(0.41)	1.30(0.61)
フィガロの結婚	2.58(1.52)	2.43(1.47)	2.40(1.47)
コッペリア	1.39(0.69)	1.40(0.71)	1.37(0.66)
春の祭典	1.80(1.22)	1.84(1.00)	1.43(0.88)

既知度評定の学年別結果をTable 6に示す。

分散分析：因子分析で得られた2因子それぞれの因子得点を用い「嗜好性因子」と「複雑性因子」のそれぞれについて、学年間に差があるかどうかを調べるために分散分析を行った結果、「嗜好性因子」「複雑性因子」の両方において主効果が有意（F (2, 1743)＝9.44, p＜.001およびF(2, 1743)＝3.13, p＜.05）であったため、LSD法による多重比較を行った。その結果「嗜好性因子」では1年生と2年生、2年生と3年生の間で有意な差(p＜.01 およびp＜.05)が認められ、また「複雑性因子」では1年生と3年生の間で有意な差（p＜.05）が認められた（Figure 1～2）。

つぎに本調査で使用した9曲それぞれについて、学年による違いを明らかにするために、各曲のそれぞれの因子ごとに分散分析を行った結果、「嗜好性因子」では“魔王”、“モルダウ”、“新世界”、“フィガロの結婚”において主効果が有意（F(2, 191)＝6.34, p＜.01およびF (2, 191)＝10.71, p＜.001およびF (2, 191)＝17.4, p＜.001およびF (2, 191)＝43.04, p＜.001）であり、また「複雑性因子」では“モルダウ”、“ローマの松”、“運命”、“新世界”、“フィガロの結婚”、“コッペリア”、“春の祭典”において主効果が有意（F (2, 191)＝22.98, p＜.001およびF (2, 191)＝13.96, p＜.001およびF (2, 191)＝33.44, p＜.001およびF (2, 191)＝42.34, p＜.001およびF (2, 191)＝33.83, p＜.001およびF (2, 191)＝4.55, p＜.01およびF (2, 191)＝14.31, p＜.001）であった。さらに、LSD法による多重比較を行った結果はTable 7に示す通りである（Figure 3～10）。

Table 7　学年間の多重比較（LSD法）

因子	曲目	1－2年	1－3年	2－3年
嗜好性	魔王	＊	＊＊	
	モルダウ	＊＊		＊＊
	新世界より	＊＊	＊＊	
	フィガロの結婚	＊＊	＊＊	
	モルダウ	＊＊	＊＊	
複雑性	ローマの松	＊＊	＊＊	
	運命	＊＊	＊＊	
	新世界より	＊＊	＊＊	
	フィガロの結婚	＊＊	＊＊	
	コッペリア	＊	＊＊	
	春の祭典	＊	＊＊	＊＊

注：＊p＜.05；＊＊p＜.01

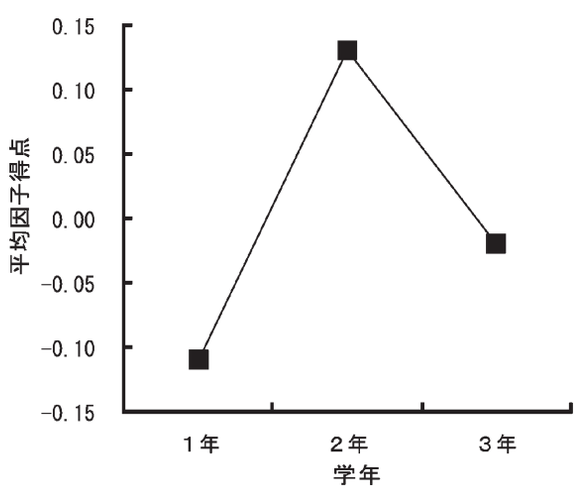

Figure 1　「嗜好性因子」の平均因子得点(全曲)

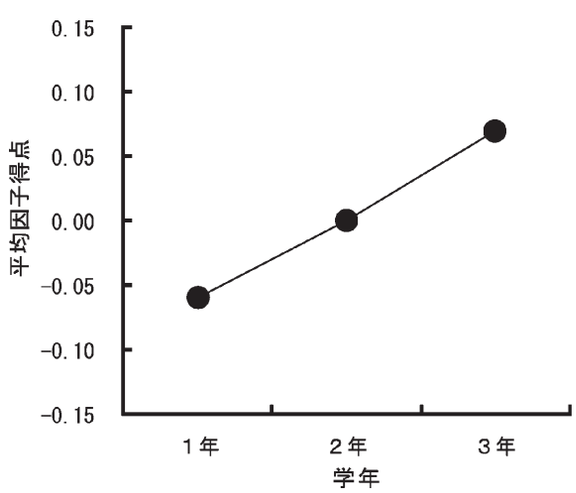

Figure 2　「複雑性因子」の平均因子得点(全曲)

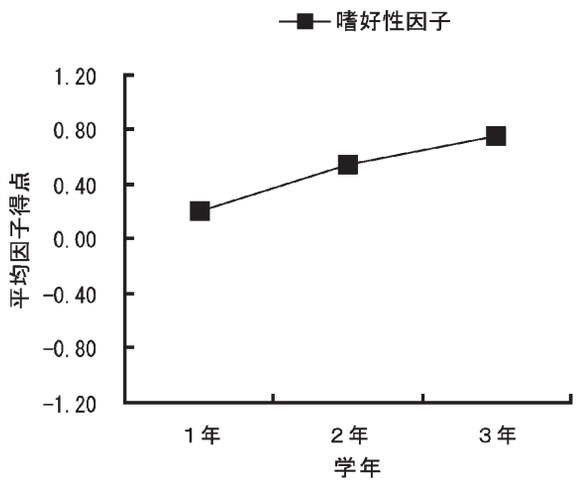

Figure 3　“魔王”の平均因子得点

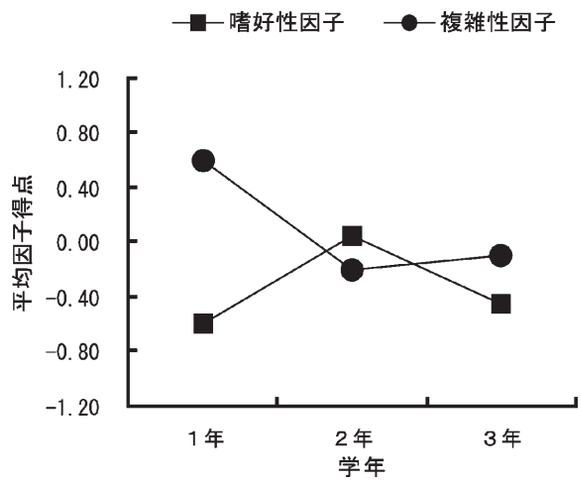

Figure 4　“モルタウ”の平均因子得点

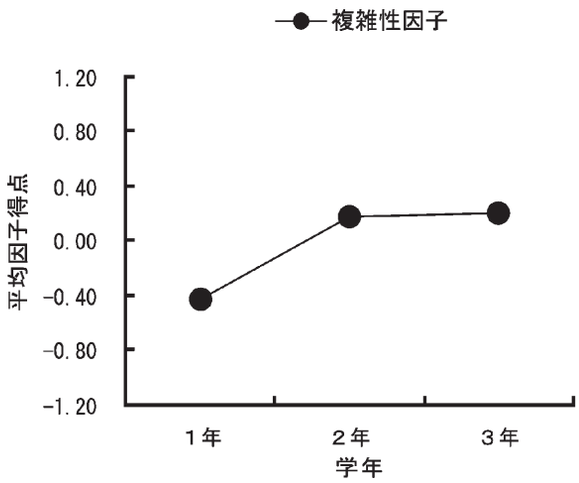

Figure 5　“ローマの松”の平均因子得点

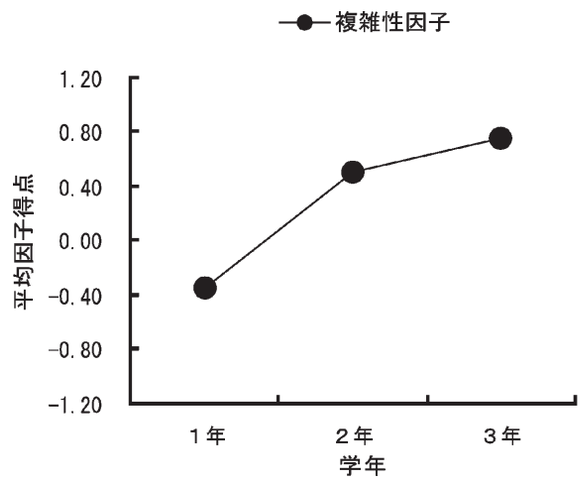

Figure 6　“運命”の平均因子得点

［考察］

本調査では、まず使用した12の評定尺度の因子分析を行ったが、結果は明らかな２因子構造となった。そして好き嫌いに関する尺度と複雑さに関する尺度の２因子（「嗜好性因子」と「複雑性因子」）が抽出されたが、「わかりやすい―わかりにくい」尺度のみ事前の予想とは異なり「複雑性因子」に対する負荷よりも「嗜好性因子」に対する負荷の方が高いという結果が得られた。

今回使用した９曲を既知度から分類すると（Table 7）、よく知っている曲は、“モルダウ”、“運命”、比較的知っている曲は、“新世界”、“フィガロの結婚”、ほとんど知らないか、まったく知らない曲は、“コッペリア”、“春の祭典”、“ヴァイオリン協奏曲”、“魔王”、“ローマの松”であった。このうち、既に授業で取り扱っている曲を上げると、３年生は、１年生の時に“魔王”、“モルダウ”を、２年生の時に“運命”を、２年生は、１年生のときに“魔王”と“モルダウ”、を鑑賞している。１年生は授業で既に鑑賞している曲が１曲もなかったにもかかわらず、どの曲においても３年生とほぼ同じであったことは非常に興味深いところである。おそらく、これは、授業での鑑賞の効果よりも、映画やCM、BGMなど日常生活において頻繁に使われているクラシック音楽の影響の方が大きいからではないかと考えられる。

各曲への印象評定では、すべての学年で、“ヴァイオリン協奏曲”がもっとも「単純」であると評価された。また、“春の祭典”と“魔王”が「嫌い」で「複雑」な曲であると評価された。因子ごとの特徴をあげると、「複雑性因子」においては、２年生と３年生がどの曲に対しても、ほぼ同じような評価をしているのに対して、１年生のみ、２・３年生とは反対の評価をする傾向がみられた。例えば、もっとも複雑な曲と評価された“春の祭典”では、３年生がどの曲よりも一番複雑と感じているのに対して、１年生では四番目に複雑と感じている。逆に、１年生でもっとも複雑であると評価された“モルダウ”は２年生、３年生ともに六番目であった。また、「嗜好性因子」でも、“春の祭典”、と“魔王”、“ヴァイオリン協奏曲”を除くほとんどの曲において同様の傾向がみられた。特に顕著であったのは“フィガロの結婚”で、１年生がもっとも好きと評価したのに対して、２年生ではもっとも嫌い、３年生

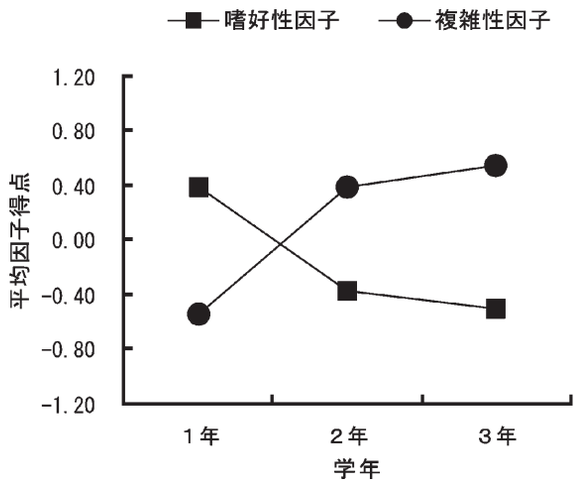

Figure 7　“新世界より”の平均因子得点

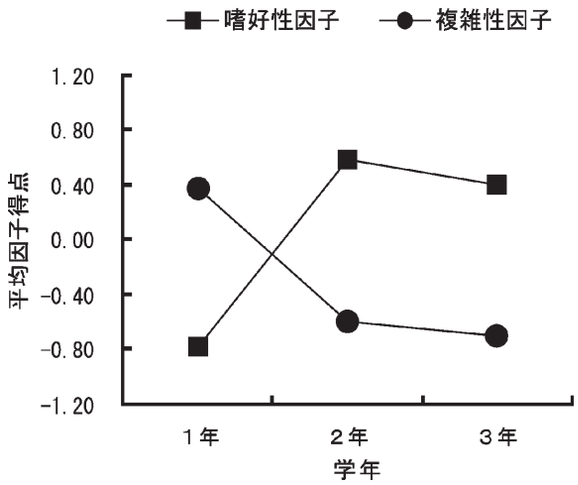

Figure 8　“フィガロの結婚”の平均因子得点

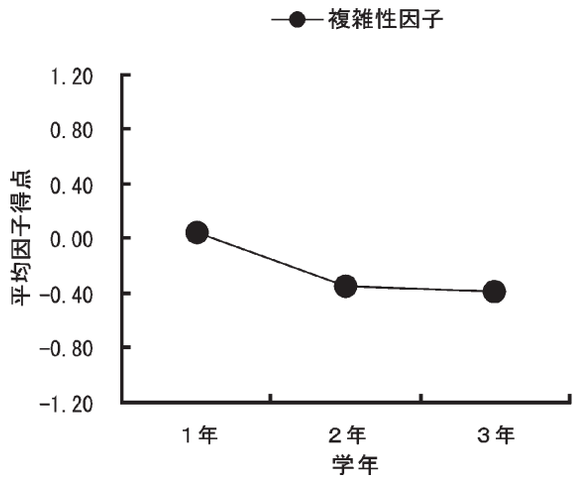

Figure 9　“コッペリア”の平均因子得点

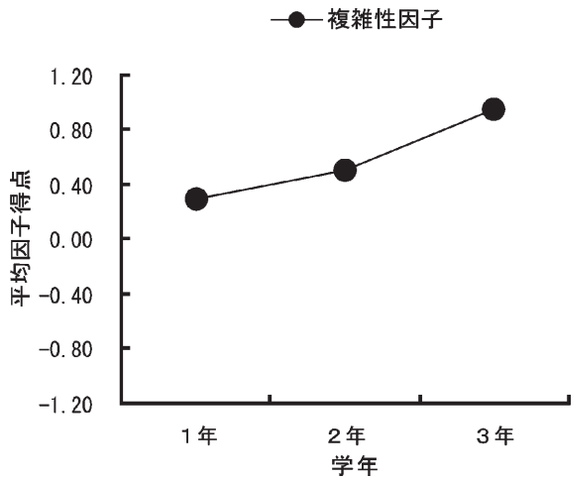

Figure10　“春の祭典”の平均因子得点

では三番目に嫌いと評価したことである。おそらく、両因子にみられるこのような傾向は、音楽認知に対する分化度の違い、つまり、学年が進むにつれて音楽の様々な知識を身につけることによって生ずる音楽認知に対する分化度の高まりが関係していると思われる。

つぎに曲ごとの特徴をあげると、“魔王”は、「複雑性因子」において学年による差はないものの、他の曲に比べて非常に高い得点を示している。これは恐らく、この曲がドイツ語の歌曲のために、自国語以外の言語に対して複雑と感じたからではないかと考えられる。今回の調査では、原曲通りのドイツ語による音源を使用したが、実際の現場では日本語訳された歌詞による音源も使用されることが多いことから、本実験でも日本語訳された歌詞による音源の使用の検討や、他の曲と条件を同じにするために、歌曲の使用をやめるなどの統制をはかる必要があったかもしれない。

“モルダウ”は、授業での鑑賞の有無に関係なく生徒達によく知られた曲であったことからか、どの学年からも比較的好かれていた。特に１年生では、“フィガロの結婚”に次ぐ二番目に好かれていることから、この曲の出典が１年生の教科書であることを考えると、１年生の教材として妥当であると考えられる。しかし「複雑性」においては、９曲中もっとも複雑と感じていることから、反復聴取など何らかの工夫が必要と考えられる。“ローマの松”は「嗜好性」、「複雑性」ともに、学年による大きな差はないが、１年生の「複雑性因子」得点が、他の学年よりも低いことから、この曲も１年生の教材に適していると考えられる。

“運命”は、「嗜好性」、「複雑性」ともに、１年生と３年生の間に差がないことから、２年生・３年生のどちらの学年でも取り扱える教材であると言える。１年生については、「嗜好性」では、他の学年との差はないが、「複雑性因子」得点が低いことから、他の学年よりも単純にとらえているため、この教材がソナタ形式の理解という指導目標を持っていることを考えると、より複雑にこの曲を捉えている２年生、または３年生で扱うのが適当ではないかと考えられる。

“新世界”は、１年生では「単純」で「嫌い」、２・３年生では「複雑」で「好き」という対象的な評価が見られた。この曲もやはり、２年生、または３年生で扱うのが適当であると考えられる。

“ヴァイオリン協奏曲”は、本実験で使用した９曲

中、すべての学年においてもっとも単純なと評価された曲である。「嗜好性」では、どの学年でも比較的好きと評価されていることから、すべての学年の鑑賞教材として適していると考えられる。ただし、単純過ぎる曲を反復聴取した場合は、ますます単純に感じるようになり、快さが減少していくことになるという先行研究から、この曲も、そういった曲の一つであると推測されるため、反復聴取を行うには工夫が必要であると考えられる。

“フィガロの結婚”は、「嗜好性」、「複雑性」ともに、２年生と３年生の間には差はみられなかったが、１年生は、その両方において２・３年生とはまったく逆の評価となった。２・３年生にとってこの曲は、「単純」で「嫌い」と評価されたが、１年生では、「複雑」で「好き」と評価されたのである。この教材の出典は２・３年下であるが、おそらく、２・３年生にとっては退屈な曲であるのかも知れない。そのため、この教材を扱うのは、１年生が適していると考えられる。

“コッペリア”は、「嗜好性」、「複雑性」ともに、どの学年でも中程度という評価がされたことから、いずれの学年でも同じように扱える教材であると考えられる。

“春の祭典”は、すべての学年において、「複雑」で「嫌い」と評価された曲であり、中学校の音楽鑑賞教材としては、非常に扱いが難しい曲である。しかしながら、このような大変複雑な曲でも、何らかの工夫をすることで、効果的な鑑賞教育を行うことが出来るはずである。その方法については、今後の検討が必要である。

最後に、今回実験に使用した曲について、それらの曲に対する既知度と、評定との関係を見てみると、よく知っている曲ほど「好き」と評価する傾向があった。「複雑性」に関しては、既知度との関係はみられなかった。さらに、多くの曲で２年生と３年生との間に有意差がみられなかったことから、鑑賞教材を選ぶ際には、２年生と３年生の区別は必要ないと考えられるが、本実験で使用した12尺度のうち９尺度（Table４）において、２年生が他の学年に比べてネガティブな評定をする傾向がみられた。これはおそらく、２年生という中学生活で一番不安定な時期と関係があると考えられる。上地・高倉（2000）は、登校回避感情が、１、３年生より２年生において高い値を示たこと報告している。また、堀（2001）は、２年生おける意欲の低下を指摘しており、他の学年よりも顕著に心身症を訴えやすいことを報告していることから、教育現場において鑑賞教材を選択する場合、その選択に思春期という問題も考慮に入れる必要があるかも知れない。この新たな問題については今後さらなる検討が必要であるといえるであろう。

引用文献

堀　篤実 2001 中学生の意欲低下とCDIスコア、心身症状および家族関係との関連、学校保健研究，43，285-298.

谷口高士 2001 音楽と感情、北大路書房.

上地　勝・高倉　実 2000 中学生における登校回避感情とその関連要因、学校保健研究，42，375-385.

参考文献

D. J. ハーグリーブス／小林芳郎訳 1993 音楽の発達心理学、田研出版.

文部省 1998 中学校学習指導要領、大蔵省印刷局.

梅本堯夫 1966 音楽心理学、誠信書房.

梅本堯夫 1996 音楽心理学の研究、ナカニシヤ出版.

注：本論文は、菅の指導のもとで森橋が和歌山大学大学院教育学研究科に提出した修士論文の一部を加筆・修正したものである。